



津田寛治さん

1965年8月27日、福井県福井市に生まれる。役者を目指し上京し、劇団員の時、アルバイト先の喫茶店に来た北野武氏に売り込んだのがきっかけで1993年公開・北野武監督作品『ソナチネ』にて映画デビュー、以後、数多くの映画・TVドラマに出演。2002年、『模倣犯』『仮面ライダー龍騎』などの演技で第45回ブルーリボン賞・助演男優賞受賞。2004年、第17回東京国際映画祭では『樹の海』での演技が評価され特別賞を受賞。2009年、第23回高崎映画祭にて最優秀助演男優賞受賞。その他にも2010年3月以降では『八日目の蝉』『怪物くん』『新参者』など出演多数。俳優業以外にも、最近では映画(ショートフィルム)監督も手掛けている。

杉並に移住したのは直感から



独身時代は世田谷区の下馬、結婚後はカミさんが住んでた中野の佼成病院の近所に住んでました。でも、そこが建て替えすることになって、この際、皆でゆったり暮らせる場所を探そうか?ということに。そしたら、子どもの幼稚園関係の友人が「うちの近所が宅地整備されてるよ」って

教えてくれて。「そうだなあ」なんて思いながら、不動産屋に行ったら、たまたまその土地を紹介されて。以前から「素敵だな」と思っていた善福寺緑地に近かったし、何よりそこに行った瞬間「俺の家はここだ!」というインスピレーションが働いたんで住むことにしたんです。

子どもがのびのび育つ杉並が好き

近所さんにも恵まれています。夏に近所の方が子ども達の花火大会を催してくれた時なんか、夜、僕が仕事から帰って来たら、花火から打ち上がったパラシュートを子ども達が歓声をあげながら追いかけていて。今の時代にあって『夢みたいな世界だな』って思いました。

休日には、家の近くを家族でブラブラ散歩したり、和田堀公園の池でザリガニ釣ったりしてます。交通公園もゴー



カートとか色々あって楽しいですね。あそこには子どもの自転車の補助輪外しの名人が居るんですよ。うちの子の時もお世話になりました。

買い物とかは、素敵な店が結構あるので、全部阿佐ヶ谷で済ます感じですね。家族で出かけて、カミさんが好きなタイ料理の店でヌードル食べて、パールセンターの美味しいパン屋さんに寄って帰ったりします。

映画人を目指して上京

小学生の頃から映画が好きでした。田舎だったから娯楽と言えば映画鑑賞。休みの日は、おやじによく連れてってもらいました。映画は成長してからは友人と一緒に観に行きましたが、その内、友人が飽きて行かなくなっても、僕は一人でも通い続けました。それで、そろそろ、職業を考える年齢になった時に「自分は映画の仕事をするんだ」って、大げさかも知れないけどそれ以外の職業の自分は想像出来なかったから。

さて、実際、『映画』っていっても何の仕事をする?と考えた時、映画監督とかにも興味はあったけど、なんとなく役者にはなれそうな気がしましてね。でも、実際に「東京に行く」って家族に言うと反対はされましたよ。親戚のおじさんなんか代わる代わる家に来て「そんな甘いもんじゃないんだ」ってお決まりのような説教をされて。で、結局、『映画』という夢の世界に逃げ込むような勢いで東京に来たんです。

役者修業時代

僕が東京に来た頃はバブル期だったから、日雇いのアルバイトの募集が山ほどあったから助かりました。その頃、演劇関係の『ツテ』とか全然無いなか、劇団とかプロダクションなんかに所属してたんだけど、今思うと、半分

騙されてましたね。「レッスン料だから」って、お金を渡してばかり、「所属プロダクションにはお金を払うもんなんだ。いつになったらお金を貰えるようになるんだろ？」なんて思ってたくらいですよ(笑)

『演じる』という感覚

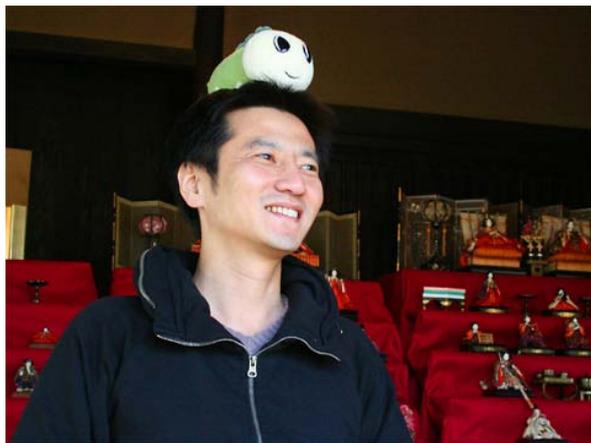
文章とか書く場合は、頭の中に映像が浮かんで、自分で作り上げていく世界です。でも『演じる』ってことは『総合芸術』で、自分一人では何も動かない、という点で全然違う感覚ですね。現場には、監督がいて、相手役が居て、音声・映像スタッフがいて、他にも衣装さんとかたくさん人間が関わり合ってる訳です。当然、一つの役柄に対して、皆が同じようにイメージしている訳では無く、様々ですよ。だから、事前の役作りは技術的な面ではあまり作り込み過ぎないようにしてます。ある程度融通がきくようにしてないと、現場でうまくいかないことが多いんです。『役になりきる』ってことを考えた時、『その役を演じること』と『役に同化すること』は少し違うんですが、経験を重ねる毎に、演じる技術ばかりに走ってしまいがちなんです。その時、技術のみで演じようとしている自分を一掃出来るのは、周囲の方達から受ける影響のお陰なんです。だから、『自分の中で作り込む』というよりは、『周りの皆から貰う』という感覚です。



役者として・これから

今まででも演じてきましたが、犯罪者の役には惹かれますね。『世間から見た事件』と『犯罪を起こした側の主観から見たその事件』は、同じ事件でも違う訳じゃないですか。だ

から、ただ『加害者』であることをクローズアップするだけじゃなく『彼が何故、犯罪に手を染めたのか』という、そこに至るまでの過程や人生や背負ってるもの、哀しみだったり、優しさだったり、役にそんなものをにじませたい、と思ってます。特に自分の子どもを持ってからそう思いますね。子ども時代は無垢だったものがどうして犯罪に向かうようになるのか、とか、日々考えさせられます。



取材を終えて

映画やTV画面の津田さんは『渋くてカッコ良い実力派俳優』という印象。でも、実際にお会いすると気さくな、しかし、感性の鋭い方だった。例えるなら、広い雪原のしんとした佇まいに周りの音や声が吸い込まれていくような雰囲気を持った方。人間の内側を深く演じ続ける津田さん、今後、どんな人間のどんなシーンを演じてくれるのか、ますます楽しみになった。

—取材・執筆：荒倉 朋子、撮影：NPO 法人チューニング・フォー・ザ・フューチャー、取材場所：杉並区立郷土博物館 古民家（取材・2010年2月25日 掲載・2010年4月22日）—